



116号
2006/9/1

日中文化交流市民サークル「わんりい」
東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>
Eメール: wanli@jcom.home.ne.jp
Eメールのアドレスが上記に変更になりました。



丹巴の娘 (中国四川省甘孜藏族自治州丹巴県にて [2006年8月])

田井光枝撮影

‘わんりい’116号の主な目次

北京雑感その⑥「楽しく食べて…」	2
媛媛来信②⑥「明、清代の山西商人」	3
「陝北女娃娃」⑧〈秀秀、芯芯、娜娜、そして苗苗〉	4
私の調べた四字熟語[5] 一衣帯水	5
松本杏花さんの俳句「拈花微笑」より	6
四姑娘山・花の山旅紙上写真展	8
ラオスでの図書館建設の経過	10
アフリカとの出会い⑩「人間のふるさとアフリカ」	12
日本とスリランカ	14
ヌワラエリヤ名物の花売り	14
中国を読む③【東方見便録】	15
‘わんりい’掲示板	16

♪ 中国人歌手・趙鳳英さんと一緒に歌おう! ♪

「中国語で歌おう!会」

まちだ中央公民館で新規発足 会員募集中! 無料体験参加歓迎

会場: まちだ中央公民館 7F・第一音楽室

JR 横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、小田急線南口徒歩5分

町田東急裏 109 ファッションビル7F

会費: 1,500円(一回ごと)

【9月の練習日】 9月15日(金) 19:00 ~ 20:30

練習曲: 「康定情歌」

中国四川省の良く知られた民謡です。歌いやすく歌詞がとても楽しい歌です。今回は4番まで一気に歌います。

指導: 趙鳳英 (元中国重慶歌舞団歌手、四川音楽学院講師)

* 体験参加が無料になりました!

皆様のご参加を歓迎します。

* 録音機をお持ち下さい。

北京は、私にとって、健康的な街です。中国料理は大好きなので、毎食美味しく頂くのですが、体重は、日本に居るときより減って、ベスト体重に近くなります。今回も、来て1週間で1キロ減りました。これは、北京の生活のお陰と言うより、日本での、「残り物を、ゴミにしない(胃の中へ捨てる)」生活から脱却したせいでしょう。さらに、その後すぐに、例年のように4キロ減りました。これは、まさしく北京での生活の賜物です。

北京の人々は、一般的に言って、朝食は比較的軽く済ませます。それでも、外で食べるとなると、お粥か豆乳と油条か餅〔小麦粉を練って、平たくして鉄板で焼いたもの——ひき肉を炒めたものや、小豆餡(あまり甘くない)が入ったものもあります〕、或はワンタンや包子、ゆで卵等を食べます。家で頂く時は、上記のようなものがなければ、ちょっとした点心と牛乳など、かなり自由にあるもので間に合わせます。その代わり、昼と夜は確り食べます。甘いものでお茶を飲むと言うことはめったにしません、食事の中に甘いものが料理として出て来ることがあります。昼食の後、家にいれば必ず1時間ほど昼寝をします。

以上のように量もたっぷり、油分の多いものが多く、おまけに昼寝まで付いているのですから、普通なら、体重は増えこそすれ、減りません。ところが現実にはちゃんと減っているのですから、やはり、北京での「歩く生活」が功を奏しているのだと思います。北京の観光旅行では、故宮でも、天壇公園でも、「バスはあちらの門で待っています」なんていわれて、内部を2時間も歩かされますね。普段の生活もあれと同じスタイルで、ちょっと近くへ買い物に出ても、3000歩は歩きます。私の住んでいるところは、バス停から近くて、部屋から出て5分もすればバス停につきますが、帰りは、道の反対側から、自転車の分も含めて12車線ある三環路を跨ぐ歩道橋を渡ってこなくてはなりません。行き先が個人のお宅だと、小区の囲いがあるので、門まで回って行かなければならないし、中心街だと、ビルの一つ一つが大きいので、隣のビルへ行くのにもかなりの距離を歩かなければなりません。そんなわけで、一旦出かけるとすぐ1万歩は歩くことになります。

北京では、不思議に歩くことが気になりません。初めは、「運転手さんに行き先を分かってもらえないだろう」とか「遠回りをされたら癪だし…」などと、タクシーに乗るのが怖くて、消極的にバスを利用したので

すが、バスは視点がなくて、街の様子が良く分かるので乗るのが楽しくなり、今では積極的に利用しています。3, 4年前には、座席の座面が取れてしまうようなバスが走っていましたが、去年辺りは、流石にそんなバスは見かけなくなりました。でも外見は汚らしくて、クラッチの丸い頭の部分が外れてしまって、運転手さんが慌てて、転がった部品を追いかけているのを見たこともありました。それが、今年になると、殆どのバスが新しくなって、観光バスと見紛うばかりの路線バスも見かけます。乗り心地も良くなったかと期待したのですが、車台、エンジンは同じだし、運転手さんも同じなので変わりませんでした。

ところが、大きく変わった点が一つありました。それは、各バスにカードリーダーが設置されて、バスカードが使われだしたことです。以前は、通勤や通学の定期はあったようですが、かなりのバスが「月票無効」と表示して、現金でしか乗れませんでした。ところが今度のバスカードは、交通局が発行するプリペイドカードで、JRのスイカと同じように、先ずカードを20円で買って、その後、乗車料として80元とか100元とか纏まった金額を払い込む方式です。地下鉄も、軽軌も同じカードで乗れます。バス料金は、路線によっては2割引になるので、随分たくさんの方が利用しています。私も地下鉄の切符売り場で買いました。因みに、このカード、全線均一料金の路線は乗った時に読ませるだけでいいのですが、距離制をとっている路線は、降りるときにも読ませないと、全線分チャージされてしまうのだそうです。何はともあれ、スーパーでの買い物と同じように、バスも、黙って乗って目的地までいけるようになりましたが、私の中国語にとっては好い事だとばかりは言っていられないような気がします。

バスが便利になったのに引き換え、タクシーは不便になりました。最近の原油の高騰が原因で値上げし、以前は初乗りが1.6元と1.2元の2種類あったのに、今回、一律2元になりました。ガソリンが高くなったので、以前のように流してはいられないと、道端に停まって客待ちをするタクシーが増えて、前は手を挙げるとすぐに停まってくれたのに、最近は空車がなかなか来ません。料金は高くなるし、捕まえにくくはなるので、利用者には不便ですが、運転手さんも、自家用車が増えてタクシーの利用者が減ってきたところへ、値上げが重なって、厳しい時代が到来したと感じています。

中国近代の明、清時代に、三つの大きな商人集団がありました。世界的に知られている安徽省の「徽商」、山西省の「晋商」、広東省の「潮商」です。「晋商」はその中で一番の位置に置かれていました。

明から清までの500年の間、山西省は中国でもっとも豊かな省でした。史籍の記載では、15世紀から19世紀まで、山西商人は穀物、塩、棉布、鋳物、茶葉などの商品を途切れることなく広く商い、北方周辺の朝鮮、モンゴル、ロシアなどの国々だけではなく、南の香港、東南アジア、東の日本、ないしヨーロッパまでも販路を広げていました。資料によると、当時、中国全土の十大富豪は、全部山西人だそうです。当時、主として北方貿易を行っていた有名な「大盛魁」と言う商社は駱駝を十萬匹も保有し、従業員は7000人もいたそうです。

十九世紀の前半になって、山西商人は中国の近代金融の発祥と

して、更に金融業者「山西票号」(両替商)を創立し、今の銀行に当たる送金為替までも経営し始めました。昔、流通した貨幣は銀塊ですので、送金を為替にすれば、重い銀塊を長距離輸送する必要がなくなり、安全性や、利便性などのメリットが生じ、沢山の商人たちに喜ばれ、利用され、それ以来、「山西票号」は全国の貨幣と資金調達業務を独占し、支店は朝鮮や日本にまでも広がりました。

山西商人は勤勉、素朴、節約、誠実、礼儀の正しさなどの資質で商の世界に君臨するようになり、同時に、白銀をどんどん故郷に持ち帰り、大量の資本を集めました。資料によれば、清代に全国の前列に並んでいた大手商社は殆ど山西の商社で、山西省に蓄積された白銀は、清政府の国庫のものよりも遥かに多く、まさに「富可敵国」(裕で国に勝つ)という言葉の通りでした。

山西商人たちはお金を蓄積するばかりではなく、それらのお金を、手工業、冶金工業、石炭工業、塩業工業、乃至は教育や文化の分野に投資して社会の経済と文化の発展に力を注ぎました。

清政府も後に、山西商人の顧客となって山西票号にお金を預けたり、貸したりするようになり、山西省は「清政府の財務部」とも言われていました。その間、もちろん山西商人は清政府から、色々商売上の便宜を得ましたが、国が自然災害に遭遇した時、政府の財政が困窮した時、軍事行動を始めた時は、政府のためにお金を立て替えたり、無償で寄付したりという事実も数え切れません。

山西商人たちは、商売管理の面でいろいろな規則を定めていましたが、家族内でも厳しい家法を守っていました。著名な商人喬家の家法には「アヘンを吸っていけない、賭博をしてはいけない、妾を持ってはいけない、女遊びをしてはいけない、下人を虐待してはいけない、お酒に溺れてはいけない」などのようなものがありました。今の山西省には、あちこちにその時代の旧大邸宅が残されています。「喬家大院」「王家大院」「渠家大院」などなどがその代表です。

現在、山西省の観光旅行には、世界文化遺産に登録された「平遥古城」や、山西商人の住宅の代表格の「喬家大院」が観光コースに組み込まれています。

「平遥古城」には、昔の商社、銀行などの部屋がそのまま保存されていて、当時の営業の様子や商社を管理する風景を見ることができますし、「喬家大院」では、当時の豪商の生活ぶりを覗き見ることが出来ます。

「三十年河東、三十年河西」(物事が良く変わる意味)と言う古い諺があります。山西商人も、輝く500年の歳月を経、清代末頃になりますと内外戦争や社会の動乱、そして新しい金融方式の出現などなどの原因でだんだん衰微して行きました。

私は、友人たちを連れて、何回もそれらの町、豪邸を見学した事があります。その壮大で古典的な雰囲気や漂う町を歩きますと、回りの木々や建築物などが観光客に、遠い昔のご主人様と家族たちの栄光の物語を語っているような感じがします。



喬家大院 中国映画「紅夢」(チャンイーモー監督、コンリー主演)の舞台にもなった。

私の手に三枚の写真があります。一枚は少女が窑洞の小学校の教室でひとりで本を読んでいる写真で、気持ちを集中して読んでいる姿が印象に残っています。一枚は校庭での早朝勉強で、何人かの子供たちが地面にしゃがんで勉強しているところで、最後列の女の子の一人が、逆光を受けた国旗を背に、一生懸命指を折りながら数を数えています。もう一枚は同じような写真ですが、赤い服を着た少女が地面にしゃがんで勉強しており、私が近づくと、頭を上げて、好奇心を湛えた大きな眼で私を見ました。これらの写真は1998年6月に黄河岸辺の一斗谷村小学校に来た折、たまたま撮影したものです。その後これらの写真はカバンの中に入れ、何度もここを通りましたが、ずうっとこれらの少女達に出会わないままでした。後になってやっと、これらの子供たちは4年生に進級して皆、郷の町の小学校で勉強するため村にはいないのだと聞きました。

2002年3月のある日、私は週末を選んで村に行きました。というのは、週末なら子供たちが郷の町から自分の家に帰っているからです。しかし、当時の子供たちは今は5年生になっているはずで、姿かたちが変わってしまっているに違いありません。果たして私は見分けることができるのでしょうか？

村の入り口で、何人かの子どもたちが道端で遊んでいるのを見かけ、リュックから写真を取り出し訊いてみますと、何と当時窑洞の教室で本を読んでいた少女がその中にいるではありませんか。彼女の名前は郝娜といい、子供たちはその子を‘娜娜’と呼んでいます。出会ったばかりのせいでしょうか、少々ごちない感じでしたが、窑洞の中や外で本を見て勉強している姿の写真を撮らせて貰いました。けれども、どれも雰囲気 unnatural です。しかしこの娘(こ)は4年前と比べると顔立ちがよくなって、道で偶然出会っても私には分からなかったでしょう。

子供たちは自発的に、私の前になり後になり、私を村の老エンジュの木の下にある窑洞へ案内してくれました。この窑洞には当時、地べたにしゃがみこんで文字を書いていた郝秀という女の子がおり、名前通りの才気のある娘です。わいわいと賑やかな子供たちは段々多くなり、今度は山を背にした日陰の窑洞にやってきました。ここでは長い間ずうっと捜し求めていた「大足ちゃん」の郝蕊に会うことができ



一斗谷村の少女達

ました。当時かなりな数の子供たちが村の小学校の庭で木の小枝を使って文字の練習しており、その中の一人で大きな目の女の子が好奇心満々の様子で私の方に目を向けました。すかさずその一瞬を写し、戻ってから写真を整理し、仔細に見ますと、眼が大きいばかりでなく、大きな足が靴から頭を突き出して仲間を探していました。

この“大足ちゃん”を私は何度も探し回りましたが彼女は学校に行ってしまうと出会うことがなかったのです。しかも偶然ながら、この窑洞はとてよく知っており、主人とも顔見知りで、更に言えば、この窑洞に泊まったことさえあるのです。偶然もあればあるものです。女の子たちは一塊になって、ピークピーク、跳んだり跳ねたり、話しては笑い、笑っては話すといった具合ですっかり打ち解けています。秀秀、娜娜、蕊蕊がそれぞれ写真を持っているので一緒について来た仲間達は羨ましそうです。一斗谷村の少女達は皆それぞれに頭が良くって、顔立ちもよく、しとやかだとは知りませんでした。丁度いい機会でしたので彼女たちと一緒に写真を撮りました。

同じ年の6月、私は再びこの村に来ました。天気は生憎で曇っており、風景は撮り様もなく、人物も陰影のない平板なものになってしまうので、写真を撮る気にならず、それならと、娜娜、秀秀、蕊蕊の一行を村はずれの大エンジュの木のところにつれて行き並んでもらいました。本当は彼女達に陕北の民謡を歌ってもらいたかったのですが、歌ってくれたのは「还珠格格」(当時流行っていた歌の題名)で、これには全くがっかりでした。そんなで私達はまた村の周囲を一巡りしました。時は初夏、アンズやスモモ

が次々熟す頃で、木の上には果実がたわわに実っており、とても美味しそうです。

普段はしとやかな娜娜がまるで猿のように敏捷に木に登り、私に食べさせようと袋いっぱいの青い杏を採りました。が、残念ながら私はすっぱいものには弱くて食べることが出来ません。ところが家に帰ると、少女達はまた何処からか盆一杯の真っ赤なアンズを届けて来ました。このアンズはまるで桃のようなかたちで、赤と黄色の色合いが見るだけで嬉しくなるようです。口に入れるとろけそうな甘さが広がりました。あまりの美味しさに一気に食べてしまうのが惜しくなり、わざわざ家の窓の外の台のところに運んで写真を撮り記念にしました。これは土地の人がアンズと桃を接木した品種で、どうりで他所では滅多に見られないのです。

秋も深まり、また一斗谷村にやってきました。この日は、娜娜の家では棗(なつめ)を干す作業で忙しくしていました。娜娜と彼女にそっくりの妹の苗苗がお母さんを助けてナツメの籠を屋根に運び上げていました。溢れんばかりに棗が入った110斤約50～60kg)程の重さがある籠をはしごを使って窑洞の屋根高く運び上げるのは至難なことです。娜娜ははしごの上部で力いっぱい引

き上げ、苗苗は下から歯を食いしばって押し上げています。姉妹二人心を合わせて協力の末、遂にナツメを窑洞の上に運び上げ、今度は選別をして陽に干します。今年は豊作で姉妹の顔は嬉しそうです。

春節の前夜、家庭の事情はどうであろうと、それぞれの家は皆、きれいに掃除をして年を越します。この日は秀秀の家が掃除をしていました。家中の布団を全部運び出して陽に干し、窑洞の壁と、オンドルの上の一年分のほこりを払いました。秀秀は手を休めず、壁紙を張ったり、見よう見まねで自分が剪っ

た花々や鳥たちなどなどの剪紙を、賑やかに年越しをし、来年が幸せであり、天候に恵まれて豊作になることを願って、片端から窓格子に貼り付けたりしていました。

雪は豊年の印といわれます。冬に入って大雪が降り、一斗谷村と周囲の山々は白一色に染め上げられ

ました。村で一番高いところにある老エンジュの木だけが天と地の間に高く屹立しているだけで、老エンジュにつるされた鉄の分銅が空中で淋しげに揺れ、灰白色の空に映えて人目を引いています。私はカメラを取り出し雪景色を写真に収めたいと外に出て、足元の老エンジュにつながる道が既にきれいに掃き清められているのに気が付きました。その道の突き当たる老エンジュの樹の下に赤い服を着た女の子が箒を動かしています。見ればそれは蕊蕊ではありませんか。なんと働き者で気の利く子でしょう。

村を回り積もった雪を踏み一巡り写真を撮って戻る頃になって、村長が老エンジュの樹に吊るされた鉄の分銅を叩いて、村の人に雪かきを始めるよう呼びかけていました。

2003年5月初めのある日、私はまた一斗谷村にやってき

ましたが、この度は少女たちに別れを告げるためでした。私の延川県での仕事は終わり、今後ここに来てこれまでのような十分な時間はないでしょう。少女達はそれぞれ自分自身で刺繍した一対の靴の中敷を私に贈ってくれ、私を感動させました。それらは彼女達の勉学の時間を割いて刺されたものであり、しかも彼女達の処女作なのです。私は感激に耐えず、それぞれの家にお礼に回りましたが、かえってご飯を食べよう留められたりしました。

好意は辞退しがたく、私は娜娜と苗苗の家で食事



娜娜と苗苗



宿舎の少女たち

作業時間表	
起床	5:40
早寝	6:25
早朝	6:45
第一学時	7:05
第二学時	7:55
第三学時	8:35
第四学時	9:25
第五学時	10:05
第六学時	10:50
第七学時	11:30
第八学時	12:10
第九学時	12:50
第十学時	1:35
第十一学時	2:20
第十二学時	3:10
第十三学時	3:40
第十四学時	4:00
第十五学時	4:40
第十六学時	5:10
第十七学時	5:30
第十八学時	6:10
第十九学時	6:40
第二十学時	7:20
第二十一学時	7:50
第二十二学時	8:30
第二十三学時	8:55

時間割

をすることになりました。夜、主人は特別に卵を炒めてくれたのですが、これは当地では上等なおかずと見なされているものなのです。私は少女達を呼び一緒に食べるように誘いましたがどうしても応じてくれませんでした。……私は食べながら苗苗が学校での日々の様子を話してくれるのを聞きました。

先ず日課はといえば、一日中予定がびっしりで、殆ど課外の活動をする時間はないとのこと。宿舎はと言えば、18人が一つ部屋で眠り、夜、顔を洗ったり足を洗ったりはしない。早朝であっても水がないので顔を洗うのは稀とのこと。“水だって飲めないこともあるし、生水だって飲めないことがしょっちゅうあるよ。”苗苗のお母さんが言います。“二人が一つ床で寝るんですよ。10何人かの子どもがオンドルの上に固まってね、どうやって寝るんだか…”そして続けて、“若し夜中におしっこをしに行っても戻ってみれば寝る場所はない…”。姉妹は一緒に声を上げて笑いました。

次の日の午後、私は早々、郷の中心の小学校へやってきました。子供たちは既にあちこち周辺の村々から続々と学校に集まってきました。一斗谷村は学校から10里程度(約5km)で、一番近く、ですから子供たちも急がずのんびりやって来ます。学校には伏羲河村から来ている先生が居り、私が彼に勉強の時間割りを尋ねると、彼は丁度ガリ版刷りの時間割を手にしており、私にくれました(図参照)。

暫くして一斗谷村の子どもたちが学校に到着しましたので、私は子どもたちと薄暗い寝室に行きますと、もともと広くない寝室のオンドルの壁際にいくつかの大小不ぞろいな木箱が置いてあり、これが子供たちの私有物なのです。ついでに彼女達に木箱を開いてもらおうと、本ばかりではなく、夜食用の林檎や干からびてばらばらになった馍馍(餡のない饅頭)の切れ端があります。私は少女達をオンドルの上と一緒に写真を撮って記念とすると共に、これが少女達の偽りのない学習環境、生活環境であることを他の地域の人にも見てもらいたいと思いました。

一年以上経った2004年7月のある日、これらの少女達に会いたいと思い、私は再び一斗谷村を訪ね

ました。一年を越す歳月の間に少女達はずい分変化していました。皆中学校に進学し縣市(県庁所在地の町)で勉強しています。子供たちの勉強の為に、蕊蕊の家は街にある貸家に引っ越していて写真の撮影が出来ず残念でした。秀秀はこの日の午後、自宅に帰ってきましたので写真を撮りましたがどこか疲れた感じで、この半年間の学校の生活が決して生易しいものでないと分かります。

2日目の午前中、遂に娜娜と苗苗が砂埃にまみれて急いで街から戻ってきました。彼女達がとても疲れているのは分かっていますが、私も又彼女達をゆっくりさせる時間的なゆとりはありません。どうしてもその日の内に縣市に戻らなければならないスケジュールだったのです。最も同情に値するのは苗苗でしょう。家に着たばかりで、まだ落ち着いて座りもしないのに、重湯(稀飯：米やアワのかゆ)を飲むや私と車で縣市に戻るのです。しかし、この娘は又車に酔い、道すがらずっと家ですすったばかりの重湯を全部吐いてしまいました。

休暇というのに、苗苗は県で英語の補習を受け続けています。自分の基礎学力が十分でなく、努力しなければ他の人に負けてしまうということを知っているのです。「この娘(こ)は本当によく勉強をし、昨年縣市の学校に変わったときの成績はクラスの真ん中だったけど、今回の卒業試験ではクラスで前から三番目なんですよ」とお母さんは言います。苗苗は主要大学に入学したいと考えています。私は心から彼女の夢が叶うことを願い、一斗谷村の少女達の想いが果たされることを願っています。

苗苗が書いてくれた“アンケート”は、原稿を揃えるときになってもまだ届きませんでした。恐らく郵送の途中で紛失してしまったのでしょうか。私が電話で彼女の理想を訊くと、彼女の夢は大学に入ることだと告げました。苗苗は、黄土高原の希望を一身に集めた苗です。彼女は私が撮影した少女達の中で山から外に出てゆく、最も希望を持てる一人なのです。

(田井記)

*原文は、ページ数の関係で今月は掲載できませんでした。'わんりい'のHPの方でご覧下さい。



少女たちが刺繍の靴の中敷

最近見たあるホームページに外務省関係の文章として、「日本と中国は“一衣帯水”の隣国、しかもともに東アジアに属し、我が国は中国から儒教や仏教を中心に、計り知れない文化的恩恵を受けてきました。云々」とありました。

また、5月25日付けの朝日新聞に次のような記事がありました。

「(中国と日本は)“一衣帯水”の隣国であり、歴史的、文化的なつながりも深いのに、双方の国民が互いに不信感を抱くのは不幸なことだ。云々」

四字熟語“一衣帯水”はこのように使われていることが分かりました。今回は“一衣帯水”を取り上げてみます。“一衣帯水”は中国では、“一衣帯水”と書き、帯の文字が微妙に異なっています。

早速、例によって、くつかの辞典で意味を調べてみますと、

- 中日辞典(小学館)「一本の帯のように狭い川や海、またはそれによって隔てられていること。たとえ隔たっていてもそのことが互いの往来の防げとはならないという意味で用いることが多い。」
- 現代国語辞典(三省堂)「帯のような狭い川や海。また、それを間にして隣りあうこと。」と述べられています。
- また別の資料では、「衣帯とは着物の帯のことから、一筋の帯のような狭い川を隔てて、両者の間隔

が近接していることをいう。ことばの構成は「一-衣帯-水」となる。」とありました。

出典は、『南史』陳后主紀(ちんこうしゅき)です。

「隋朝初年、隋の文帝である柳堅は、東晋以来の南北分裂の局面が基本的に終結したと思っていました。しかし南朝最後の陳王朝は、天険である長江に拠りかかり、長江を頼りにして長江中下流以南の地区を統治していたのです。

この陳王朝末代の君主である陳后主は快楽を貪り、贅沢三昧で毎日歌舞に溺れ、それに浸りっきりで大平を享受していました。

一方、当時の庶民は飢えと寒さで窮乏に陥っていて、庶民とは余りにもかけ離れた陳后主の態度に対して歯ざしりして怨んでいました。

これらの状況を見た柳堅は陳朝を消滅させ、全国を統一しようと決心したのです。彼は輩下の大臣達に向かって「たとえ大きな河(長江)に遮られていると言っても、あの困っている人々を救わずにおられようか!」と言いました。そして船を建造し、水兵を訓練し、水戦に慣れさせました。その後、大軍を乗せ、天険である長江を渡河し、一挙に陳朝を消滅させ、陳后主は投降しました。」

此の事から、「たとえ隔たっていても、その事が互いの往来の妨げにならない」という意味で多く用いられるようになったようです。

nián huā wēixiào
松本杏花さんの俳句《拈花微笑》より

天竜の淵の万緑迫り来る

bì bì tiān lóng chuān
碧碧天龙川

shān bǎi huáizhōng yǒu shēnyuān
杉柏怀中有深渊

wàn lǜ bījìn qián
万绿逼近前

季语：万绿，夏。

天龙市位于日本静岡県西部天龙川下游。二俣位中心地区，有秀美的杉木林和丝柏林、主要发展林木加工业。

此句描写了郁郁葱葱的森林夏季繁茂时向天龙川渊潭蔓延的景况。作者是以深渊的角度作为观点、所以才会有“万绿正向近前逼来”的感觉。

shèng xià liè rì yán
灼熱の砂丘はまろし遠州灘

shèng xià liè rì yán
盛夏烈日炎

zhuó rè shāqiū gǔngǔnyuán
灼热沙丘滚滚圆

xiǎn è yuǎn zhōu tān
险恶远州滩

季语：灼热，夏。

远州滩为于日本静岡、爱知两县的南面。海域。御前崎至伊良湖岬之间约120千米处。因冬季西风强烈而避风港少，为海上险滩。

此句描述了盛夏是晒得发烫的沙丘积聚在远州滩的情景、令人感到远州滩周围环境的险恶。

四姑娘山・山の花旅 紙上写真展

今年も、四姑娘山自然保護区管理局顧問の大川健三氏の案内で、'わんりい'の有志たち、2組（河本隊/11名：2006年7月5日～13日、田井隊/14名：2006年7月25日～8月5日）が四姑娘山自然保護区を訪ねました。四姑娘山自然保護区をフィールドとして、素晴らしい写真を発表し続け、この地を知り尽くしている大川健三さんの心配りの行き届いた案内ならではの四姑娘山自然保護区の奥深くを訪ね、未だ手付かずのままの大自然素晴らしさを味わう感動の旅でした。大川健三氏には深くお礼申し上げたいと思います。

花、花、花…と、高山植物の種類は可憐な花から滅多に出会うことのない貴重種まで数え切れないほど。とても紙面では紹介しきれません。いずれどなたかがご自分のHPで紹介の労を取ってくださるのをお待ち下さい。というわけで、花々と四姑娘山の旅の様子をほんの一部を紙面で紹介します。

自然保護地区の中心には6250mの四姑娘山を主峰として、三姑娘山(5355m)、二姑娘山(5276m)、大姑娘山(5025m)の四姉妹の山が厳しくも神々しいばかりの威容で聳え、5000mを越える山々が周辺を取り囲んでいます。それらの山々が抱える氷河から流れ出る清冽な流れが谷となり、広がって大地を潤し、湿原となり、太古の昔からの変わらぬ姿で動植物をひそやかに育てて来ました。この静かで靈気の満ちた地域が、遂に世界自然遺産に指定を受けたとのこと。人は入りやすくなり、誰でも楽しめるように設備が整えられるようになるでしょう。けれど、何故か痛ましい気持ちがあるのはどうしてでしょうか。改めて、世界自然遺産のあり方を問いたいという気がします。

(田井)

河本隊：鍋庄坪／大海子／花海子／犀牛海子を巡る花の旅から



ユリ科 バイモ属
(青木孝子氏撮影)

薬用植物 貝母(バイモ)。とても貴重な漢方薬(鎮咳・去痰)



青いポピーの群落(青木孝子氏撮影)



キク科 シンカラティウム属(渡邊規子氏撮影)
明治時代の僧「川口慧海」にちなんで命名



コリダリス科 キケマン属
(河本義宣氏撮影)

牧野の図鑑ではケシ科に分類されている。ムラサキケマンの仲間と思う。ブルーポピーに混じって紫に輝いているのがこの花



赤いポピーの群落(河本義宣氏撮影)



キンポウゲ科 オキシグラフィア属
(戸田恵子氏撮影)



サクラソウ科 サクラソウ属 →
(彦谷あい氏撮影)

今回とても沢山のサクラソウの仲間を見ました。それも日本では見たことのないものばかり。この concina は極めつけ?!

大姑娘山登山組 (田井隊 14名の内6名が大姑娘山/5025 m登頂) (登山組の写真は葛谷孝司氏撮影です)

大姑娘山登山ベース 老牛園子 (関根茂子氏スケッチ)



いよいよ間近になる四姑娘山主峰の威容

遂に大姑娘山に登頂!



めざすはあの頂き



大姑娘山山頂からの眺め



大姑娘山山頂



大姑娘山登山中に見つけた綿毛でくるまれた不思議な植物

長坪溝散策組



5000mを超す高峰が長坪溝より直接突き上げ、これらの峰々が抱える氷河と万年雪から流れでる清冽な流れが谷を潤す (大川健三氏撮影)



抜群の眺めに思わずバンザイ! (大川健三氏撮影)



羊満台海子へは険しい山道を馬で行く (沖田辰夫氏撮影)



四姑娘山のベース・日隆から馬に乗って7時間、長坪溝最奥のキャンプ地から、更に急斜面を馬で4時間。標高約4600mにある羊満台海子。四姑娘山主峰や対岸の山々が映る。年間訪れる人は10名を越えないといわれる神秘の海子だ。(田井撮影)

ラオス山の子ども文庫基金 (<http://www7a.biglobe.ne.jp/~laosyamanoko/> 安井清子氏主宰) では、ラオス東北部の昔ながらの営みの残る山村に絵本のある子ども図書館(今年度は、活動を始める「準備棟」)を計画し、実行に移すため、2005年11月から、約半年ラオスに滞在しました。

わりい 114号の安井さんの報告にもあったように、材木と石の材料手配ができるまで多大な困難があり、建設の道程は、まさに珍道中でした。遅々として進まず、内装工事を残して、農繁期の前に敢えなく中断しました。今回は、モンの村が米を収穫し、農繁期の終わりを迎える、10月に建設再開の予定で準備を進めます。安井さんは、その準備も含めて先にラオスに出発しました。

次期工事では、建具(窓、戸)と床(板床、オンドル床)、壁(竹下地、土壁)を作り、周辺の環境(造園工事)も整えます。モンの正月は、毎年の収穫時期と月の関係で決まるので、モンの人でさえ直前になるまで分かりません。是非その前に、このみんなの「小さな家」を完成させ、そこでお祝いをしたいものです。

▶ 2005年度の活動の主な動き

2005年11月	<ul style="list-style-type: none"> ● 現地入り(安井・鈴木) ● 太郎さんの母君現地訪問/村で活動開始を祝う ● 儀式ピエンチャンにて設計準備
2005年12月	<ul style="list-style-type: none"> ● 現地活動開始/モンの正月を迎える ● 材料準備(土、藁、竹)、設計、模型制作
2006年1月	<ul style="list-style-type: none"> ● 東京でおおたか静流さんのチャリティコンサート ● 現地 材木購入
2006年2月	<ul style="list-style-type: none"> ● 材料探し(石を隣村から運ぶ)/基礎造り2006年3月 ● カンナがけ、家具作り、オンドル床
2006年4月	<ul style="list-style-type: none"> ● 本体工事(木工事、屋根工事)、養生 ● 中断-帰国
2006年10月	<ul style="list-style-type: none"> ● 建設再開予定
2006年12月	<ul style="list-style-type: none"> ● 完成予定 正月と同時に開館を予定

一連の建設作業は、ラオスだからできるのであって、日本の過剰なほど管理(製品の組み合わせ、過度な効率化)された「建設」のなかでは、およそありえないモノづくり、スケジュールで、それにまつわる人々とのさまざまな遣り取りがありました。



できた机で早速、絵を描く子ども達



遠足気分で石運びをする

珍道中の滑稽さ、我々の力不足を正当化するつもりはありませんが、この建設自体が「物語」の様でもありました。個性豊かな「協力者=登場人物」が出てくることで、このプロジェクトは「うまく行く」と感じたものです。彼らが主役なのです。

帰国した日本では、遠く山を見ると材木になる木が「わんさか」とあるけども、近く住宅地の家々には、新建材が蔓延り、日本には、伝統の材料と技術があるのに、なんでこんな町並みが広がっているのだろうかというのが、日本に帰ってきたときの率直な感想です。現在の木造住宅の下地になっている、ラワン合板等は大量の石油と安価な人件費を使って、ラオス、ベトナム、タイから来ていることを忘れてはいけません。

《建設作業中の人々の模様》



オンドルの床全体、ここに土を厚く塗って最後に和紙を貼り、油を塗って仕上げる。パズルのように、形の不揃いな石を並べる。下に煙道が通る。



屋根茅材を編んでくれた奥様方

1. 『家具工事』

2月の末にもなろうと言うのに、供給先の村の事情により、木材は完全には揃わない。しかも構造材が後回しにされては、詳細も決められず、先に揃えた柱材(乾燥材)の加工も出来ない。そこで、既にある木材のカンナ掛けをし、先に家具工事を行なった。

2. 『オンドル工事』

冬には、3℃まで冷え込むこの村での窯の廃熱利用した暖かい床「オンドル」を提案、実施した。順序としては、屋根、床が出来てから行うべきだが、材料と人の都合を理由に、先行させた。

窯からの熱い排気の通り道(煙道)は石積みで行い、オンドル石(煙道の蓋、床盤)は平たく薄い石を使う。木工事が終わり、床ができてから、最後の仕上げを行なう。不均一な自然素材を扱うことは難しい。

3. 『上屋工事』『屋根茅葺き・茅作り』

光採りの上屋の部分は、モンの家の丸太を使った作り方で行なった。参加できる人の裾野が広がり、作業が早くできる。

人を探すに当たって、安井さんと相談し、今まで遠巻きに見ていた人に取って頼んだ。仕事を請けた4人は、模型で打ち合わせをした後、早速動き出し、見る見る間に材料を集め、上屋を作ってしまった。この上屋作り、屋根茅作り、茅葺きで関わる人も増えた。彼らの子ども達、奥様方も急に親しげに寄ってくるようになった。それらもまた収穫であった。



上屋は、モンのやり方で作る

‘わんりい’のおたより会員継続のお願いとお誘い

年会費：1500円 入会金なし 郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

「それぞれの国や民族が長い歴史の間に培った、それぞれの文化を知り、市民レベルでの国際友好活動を目指している市民ボランティアの会として、日本に外国の方々が増え始めた1992年に活動が始まりました。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催したり、2月と8月を除いた年10回、会報‘わんりい’を発行しています。

新規入会はいつでも歓迎しています。会費は、おたより制作費と送料及び活動のサポートに当てられています。活動の様子はおたより又は‘わんりい’HPでご覧ください。

‘わんりい’のおたより会員に申し込まれますと、会報送付の他、一緒に活動される仲間として、‘わんりい’の全ての活動に参加できます。

問合せ：‘わんりい’ TEL/FAX：042-734-5100

‘わんりい’掲載原稿募集

‘わんりい’は、会の皆さんで作る会報です。会の活動趣旨に添う原稿やイベント情報を募集しています。明るい楽しい内容でどんどんお寄せ下さい。出来るだけ早く掲載したいと思っておりますが、ページ数の都合で遅れることや若干手をくわえることもありますのでご了承下さい。

* 問合せ：‘わんりい’事務局へ

最近、よく見聞きする言葉がある。スローライフ、有機野菜、無農薬野菜、エコロジー生活など。どれもキーワードは健康と環境であり、体にやさしい味、環境にやさしいものを生活に取り入れようというライフスタイルの提案である。

さて、私が生まれた昭和49年の日本の生活はすでに「先進国の生活」であり、電気、水道、ガスのライフラインは当たり前で、電車、車での移動は当たり前のこととして育った。そんな私がアフリカに住んでみることになった時は、それらが無い生活というのは想像できないことであつたし、不便なのだろうと考えていた。アフリカの生活は、まさに「後進国の生活」なのだろうと不安な気持ちであつた。

そしてその予想は的中し、ほとんどの家や建物に、町に、村に、電気、水道、ガスはなかった。しかし今帰国してみて、確かにそれは「不便な生活」であつたかも知れないが、「人間的な生活」であつたと思う。そもそも人間が生きていくとはこういうことなのだと、20歳を過ぎて始めて知った。しかし最初は私にとっては驚きで、衝撃的な生活であつた。

電気の無い生活は、夜になると見えなくなる生活だ。本を読むときは、灯油の入ったランプを用意する。人が集まっておしゃべりするときも、このランプを中央に置く。はっきりと見えないゆえにしゃべっている人の表情はよくわからないこともあつた。特に、夜の帰り道は、私にとってはチャレンジであつた。全く見えない闇を、家まで歩いていく。私の家を知っている友人に送ってもらわなければ帰れない。手を引いてもらいながら、見えない足元にびくびくしながら帰る。友人はたいてい、笑いながら普通に話している。



水屋さん



木炭屋さん

またある時、孤児院にいた子供が、体調が悪くなり、夜に病院に連れて行くことになった。病院まではすぐ近くで、直線距離で数百メートルであるが、ドアを開けると真っ暗闇であつた。情けないが、その子供の手を引いてもらい病院まで行った。

「何で見えるの?」と私は聞いた。
「よく見ると、見えるよ。もし見えないなら、屋間のうちからよく見て覚えておくと良いよ。月も出てるしきつと見えてくるよ」と子供は言う。

水が蛇口をひねっても出ない。蛇口があるというこ

とは、農村に比べると進んでいるのであるが、絶対水が出るとは限らない。さて、どうするか？水を買に行かなければいけない。タンクを持って出かける。行きはタンクが空なのでらくらく運べる。そして自分のタンクを、タンクの行列の最後尾に置いておく。そうすると、水屋さんが水を入れてくれる。タンクひとつで20円位だろうか。そしてそれを持ち帰るのが難しいというか、力がないだけなのであるが一人で運べない。周りをみると、子供もお年よりも女性も、一つと言わず二つ持っている。

「どうして持てるの？」と子供に聞く。「どうして大人なのに持てないの？」と逆に聞かれる。お金を払って運び屋さんに運んでもらうこともある。しかも自分より幼いだろう男の子に。

その水を使って洗濯をする。丸いたらいを持ってきて、水をはり、洗濯物と洗剤を入れる。一枚一枚洗っていく。毛布などの大きいものは、二人組みで左右の端を持って、雑巾のように絞っていく。そしてロープに引っ掛けていく。ケニアの日差しは強く、1、2時間もあれば、ぱりぱりに乾いてくれる。面白いのは、例えば洗濯物を干しているときに雨が降ってくると私は、すぐに家の中にしまうのに対して、ケニア人はしまわない。最初は、忙しいから、雨に気づいてないからしまわないのかと思っていたらどうも違うらしい。

「雨に濡れるよ。早くしまわないと」と私が聞くと、「雨は神様からの贈り物。落とし忘れた部分もきれいに洗っておいてくれる。雨は綺麗な水と同じだから」と。そもそも、雨が最終的には飲料水にもなり、生活用水にもなっているのだから確かに汚くもない。でも、やっぱり私は最後まで雨に濡れた洋服を綺麗になったとは思えず、雨になる度に洗濯物を取り込んでいた。

アフリカでの生活のうち何が大変かという、やはり衣食住のうち「食」であると思う。

もちろんナイロビなどの都市部で優雅に暮らしている外国人やケニア人の裕福層にとっては、関係のないことかもしれない。ケニアの人口の大半を占める農村の人々は、基本的には自給自足の生活である。田畑を耕し、作物を植え、手入れし、収穫をする。一つの野菜が口に入るまでに、数ヶ月もの月日がかかっている。農薬や化学肥料は高価なものであり、たいていは無農薬で、肥料は牛の糞が使われている。日本では、無農薬や有機野菜と呼ばれ、市場では多少高く売られているのを見かけるが、それはケニアでは当たり前の

ことだ。主食の豆などは、収穫後も日持ちさせるために高床式の倉庫などで保管する。とうもろこしも、粉にして保管し、「ウガリ」という主食になる。

それらを料理する燃料は、都市部ではガスや電気を使っているところもあるが、農村部では薪や木炭が多い。薪は、山から拾ってきたり、購入したりする。木炭は、環境問題もあり政府は木炭を製造、販売することを禁止しようとしているが、ガスに比べ割り安で、火力も強く、火も簡単に点くことから人気が高い。そう考えるとお湯を沸かすのも、水を汲み、薪を集め、火を点けて、沸騰させるという、さまざまな作業と時間がかけられている。毎日の食事も手間ひまがかけて作られている。そして、お母さんの手だけではなくて、家族みんなが、家族が生きていくために、何らかの仕事を担っている。

私が今まで送ってきた便利な生活の危うさは、「人間らしくしない生活」の危うさがあるように思う。そもそも、私達はもっと五感が発達していて、もっと体力があって、生命力があったのではないかと思う。ケニアでは、生活することに、生きていくことにとても時間と手間がかかる。「便利なものがない」生活は、自分の身体を健康に丈夫にしてくれたように思う。子供と一緒に、農作業をし、水を汲みに行き、洗濯や料理をし、暗闇を歩き、車を使わず歩き、その生活に一つ一つに時間をかけた。そんな生活の様子を日本の祖父母への手紙に書いたことがあった。「昔は日本もそうだったね」という返事が返って来た。

そんな時代から発展してきた先進国日本の過去を知ることも難しくなった。私の五感は、とても発達したように思う。そのすべてを総動員して生活するとき、人間はストレスとは無縁の健康体であるように思う。私は、日本で失っていた「人間らしさ」をケニアでの生活で取り戻したように思う。私の体は、もっといろいろなことが出来ることを発見した。

今流行しているスローライフや環境に優しいエコライフなどは、人間の人間らしさを思い出すからこそ、リラックス出来たり、心地よかったりするのではないだろうか？アフリカにはまだそんな生活がある。そしてそれは、後れた国の生活と言ってしまうには違う気がする。人間がそういう生活をしてきたことを思い出させてくれるふるさとのようである。アフリカの人は先進国の便利な生活へ憧れまたそれを目指し、先進国から来た人間は、アフリカの生活に懐かしさを感じて、いいなと思う。不思議なことだ。

スリランカは、インド半島の先端に浮かぶ、北海道を一回り小さくしたぐらいの小さな島国で、その昔、セイロンと呼ばれていました。人口は約2000万人程、正式な国名は、「スリランカ民主社会主義共和国」です。

スリランカがかつてのセイロンだったといえば、多くの方は紅茶・宝石・スパイスの産地、仏教遺跡の多い国、辛いカレーなどを思い浮かべるでしょうが、先ず日本との外交関係について紹介したいと思います。

日本とスリランカは1952年4月に外交関係が樹立され、現在まで良好な関係が続いています。実は、両国間の友好関係の礎に、“Hatred ceases not by hatred, but by love”という仏陀の言葉の一節があります。

第二次大戦後、日本が与えた戦争被害に対する賠償、日本独立の為の条件等を決めるので1951年9月、サンフランシスコ対日講和会議が開催されました。この席上で、後にスリランカの初代大統領になるセイロン全権大使ジャヤワルダナ大蔵大臣（当時）はアジアからの参加国中ただ一国、上記の一節を引用して対日賠償請求権を放棄する旨の演説を行いました。

「セイロンは日本から受けた損害に対して賠償を請求する権利を放棄する。仏陀の言葉にある“Hatred ceases not by hatred, but by love”憎悪は憎悪に

よって払拭されない、慈悲の心によってのみ払拭されると信じているからである。また、日本が主権自由国家になる過程の妨げになるので講和条約に制約をつける事には賛成できない」というのが演説の主旨でした。

この演説は他国の出席者にも感銘を与え、日本の独立に消極的であった講和会議の流れを変えました。では何故、セイロンは日本に対して賠償請求権があったのでしょうか。

当時のセイロンは連合側側の英国領であった為に1942年4月日本軍はコロンボ港、ラトマラナ国際空港、トリコマリ港を攻撃しています。この攻撃は英国軍に損害を与えただけでなく、民間人への人的被害、軍事施設周辺の民間人所有の田畑、ゴムプラント等にも損害を与えています。この様な理由から発生した損害に対する賠償請求権を持ちながら、ジャヤワルダナ全権大使はこれを放棄する旨の演説を行いました。

スリランカでは多くの人達が現在でもこの演説を覚えています。これに対して私達日本人は、どれだけの人がこの演説を知っているのでしょうか？

‘わりい’の紙上でスリランカを紹介するにあたり、観光ガイドには書かれていない、スリランカの話を紹介したいと思います。日本とスリランカの関係を再認識して頂ければと願っています。

ぼくが見て感じたスリランカ紹介 1

ヌワラエリヤで観光客が必ずと言っていいほど見かける光景は、坂道で花を売る青年達の姿です。今回はスリランカに行った事がない方、行ったにも拘わらず運悪く花売りに遭遇出来なかった方にヌワラエリヤの花売りを紹介します。

ヌワラエリヤはスリランカのほぼ中央部の高原地帯にあります。コロンボから約180km、車で5～6時間です。19世紀の英国植民地時代、日本でも有名なセイロン紅茶の産地として、また在留英国人の為の避暑地として発展しました。現在でも紅茶の生産地、避暑地、観光地として有名ですが、豊かな水と高原の涼しい気候を生かして、スリランカ随一のビール製造地であり、高原野菜、果物、花の生産地としても有名です。

1889年にアジアで最初にオープンしたゴルフ場、英国風のクラシックホテルが開業当時の雰囲気のままに営業しています。夜間には、温度が10℃を下回る事もあるのでホテルには暖炉があり、商店ではセーター等の防寒着も売られています。

ヌワラエリヤ名物の花売り

標高約1900mの高原にあるヌワラエリヤから標高約500mのキャンディまで65kmの国道5号線は曲がりくねった下り坂が続きます。

ヌワラエリヤをスタートして暫くすると道は九十九折の急な坂道になります。急坂が始まる辺りに何人かの青年達が花束を抱えて立っています。青年達と言っても12、3歳位の子供から20歳近い人まで様々な年齢の人がいます。最初にこの場所で、青年達から花を買わないかと訊かれます。そこで花が売れば彼達の苦労はないのですが、この時点で花を買う人は殆どいません。ヘアピンカーブを一つ曲がったところでも、似た様な人達が花はいらないかと訊いて来ます。この場所でも買う事を断って更にカーブを一つ曲がると、今度は少し息を切らせた人達が花を持って待っていて、ここでも花はいらないかと訊かれます。

このあたりで観察眼の鋭い人は、一つ前のカーブに立っていた人達と顔つき、服装が似ている事に気づき始めます。更にカーブをもう一つ曲がると、今度はか

なり息を切らせた人達が花を持って待っています。人数も減ってきています。坂が始まる辺りにいた青年達が先回りをして待っているのです。

実は、この青年達、車が通り過ぎてしまうと花束を抱えたまま、崖を駆け下りて近道をして次のポイントで待ち受けているのです。何度か繰り返すうちに、諦めて最初の場所に戻って次のお客を待つ者も出てきますが、諦めずに追い駆けごっこを続ける者もいて最後には根負けしたお客に花を買ってもらえるのです。

彼達の足元を見ると、靴を履いている人もいますが、ゴム草履や裸足の人もいます。この足で岩だらけの急な崖を駆け下りてくるのです。そして、これだけの苦勞をして売れる花は一束100～200ルピー位にしかありません。売れたとしても何度も先回りをすればするほど、帰り道は遠くなる事になります。一日に何束の花束が売れるのかは知りませんが、花を売るための努力には頭が下がります。

スリランカでは家計の為に小さな子供が一生懸命に働いている姿をよく見かけますが、この花を売った

お金も全額が彼達のお小遣いにはならず、一家の家計を支えるたしになります。花を売ると聞けば、何か優雅な商売と感じますが、ここでは自らの肉体を酷使した過酷で危険な商売です。そして、花を買ってもらった時には、そんな厳しい商売とは思えない笑顔がこぼれます。

乗合バスでは、残念ながらこの花売りが崖を駆け下りて商売するところを見られません。なぜって花売り達のお客さんは観光客と決まっているからです。又、キャンディから南部に向かう車も彼らの商売の対象になりません。登り道では、彼達の足がどんなに速くても車の先回りは無理でしょう。

スリランカを旅して、下りの車に花を売ろうと崖を駆け下りる彼達を見かけたら、花が売れずがっかりしている青年を見かけたら「アーユポーワン」と言って花を買ってあげてください。きっと、とびっきりの笑顔が見られますよ。「アーユポーワン」はスリランカの国語であるシンハラ語で、こんにちは、さようなら等の意味です。

中国を読む③⑤ 東方見便録—「もの出す人々」から見たアジア考現学 内沢 句子著(文春文庫)

多くの日本人がそうであるように、私も仕切りのない中国のトイレにはかなり抵抗がある。初めて中国のトイレに行ったときは、しばらく立ちすくんだ。私の後に入ってきた、現地の美人ガイドさんが不思議そうな顔して「その便器があいている」と教えてくれたうえで、平気で用を足したのは、何よりも衝撃的だった…。

美人ガイドさんが個室でなくても用を足せるのは、そういう文化だからだ。逆に私が平気でしていることは、ガイドさんから見れば齷齪を買うこともあるだろう。文化の違いは、そんなときに痛烈に肌身で感じるのかもしれない。

本書は、排泄文化を知ることで、そこに住む人々の国民性や社会構造を浮き彫りにしてしまおうという企みの一冊。排泄という大切だけどユーモラスな行為を大真面目に研究し、検証し、考察している。渡った国はアジア8カ国。さらに、各国トイレの丁寧なイラストも付いて親切なことこの上ない。

中国のトイレもさることながら、著者とイラスト

レーターが回った国々のトイレもすごい。豚に大便を食べさせてしまうネパールのトイレ、魚に大便を食べさせるインドネシアのトイレなどトイレ自体が(私たちから見れば)変わっているものもあれば、イランのように、排泄をするときの方向、排泄後の儀式、禁止事項がイスラム教によって事細かに決められているところもある。仕切りが無い!と中国トイレで驚く以上に、世界のトイレは奥が深かった。

ちなみに中国のトイレは、なぜ仕切りが無いのでしょうか? そんな重要なこと、今まで疑問さえ抱かなかった私だが、著者の見解で膝を打った。それは「トイレという狭い個室は瞑想したり、考えを巡らすのに適した空間」であり、社会主義国家の中国は個人の自由な思想を妨げるべく、トイレの壁を取っ払ってしまった、というもの。人間の最も根源的な営みを行うトイレ。そこに凝縮される価値観は、やっぱり奥が深い…。

(真中智子)



第16回中国文化の日 江西・貴州に中国芸能のルーツをたどる

中国の仮面展と仮面劇

http://www.jcfc.or.jp/event/general_bunkanohi.html

主催：(財)日中友好会館／協力：中国民間文芸家協会・全日本空輸(株)

◆中国の仮面展—— 展示の部

- 会場：日中友好会館美術館
- 会期：2006年10月1日(日)～10月22日(日)
開館時間：10:00～17:00、10月20日は21:00まで
休館日：10月3日(火)、10月10日(火)、10月17日(火)
入場料：無料

【中国の仮面】

江西省と貴州省の仮面約100点をはじめ衣装や小道具類を展示します。村人達が大切に保管してきたものや、地元の彫刻家の手によって彫られたものなど、貴重なものばかりです。二つの地方で大きく異なる、バラエティ豊かな仮面の世界をご堪能ください。

◆中国の仮面劇—— 公演の部

- 日時：2006年10月20日(金)、10月21日(土)、10月22日(日)
- 会場：日中友好会館地下1階大ホール
開演時間：20日19:00～、21・22日15:00～
上演時間：約50分
開場：各回開演20分前
- 演目：[江西] 開壇、和合舞、儼公儼婆など
[貴州] 単騎千里を走る(三国演義より)、
楊六郎大戦張彤(楊家将演義より)
- 入場料：300円(定員250名、全席自由の豊席)
当日券(400円)は空席がある場合のみ発売

入場券販売方法：2006年8月10日より前売り開始
チケットぴあ 0570-02-9999(Pコード 371-381)

0570-02-9988(オペレーター予約)

インターネット予約 <http://www.pia.jp/t>

【中国の仮面劇】

中国では太古の昔から、仮面劇が演じられてきました。心霊崇拜や吉祥平安奇岩の表現として、舞踊を主体とするものは儼舞(なぶ)、演劇性の濃いものは儼戯(なぎ)と呼び、現在でも各地の村々で、歴史の古い仮面劇が大切に伝承されています。

顔に独特の化粧を施す京劇や昆曲も、ルーツを辿ればこの仮面劇に行き着くといわれており、中国において仮面劇は“生きた化石”、“中国のあらゆる芝居の源流”とされています。更に、近年では日本の神楽や能楽との関連性も指摘され、日中両国の研究者による比較研究が進んでいます。

仮面劇の多くは、春節や祭の際、神々への芸能奉納や邪気を払うための儀式として、上演されます。その内容や演目は、地域や民族によってさまざまに多様性に飛んでいます。

また、元来その土地の村人達による村人達のための上演であり、現在、商業ベースで上演されるケースは大変稀です。その為、中国本土でも限られた時機と地域以外ではなかなか目にすることが出来ない貴重な民間芸能であるといえます。



貴州省の仮面



儼公儼婆(江西省)

‘わんりい’ お料理交流会

ベトナムの留学生・ファム・クオック・タンさんと一緒に料理を作って交流しよう!

タンさんは現在、東洋大学三年在学、機械工学専攻中のハンサムな青年です。ご両親は、ホーチミン市でレストランを経営しており、タンさんのベトナム料理はととても美味しいと評判です。今年もタンさんと一緒にベトナム料理を作って交流しましょう。

▶ 場所：鶴川市民センター・第二会議室

▶ 月日：9月10日 日曜日

▶ 時間：タンさんと一緒に料理を作る人 9:30～
食べるだけの人：12:00～

▶ 会費：2000円

▶ メニュー：生春巻き、フォー、青いパイアのサラダ、デザート、ほか2、3品

▶ 募集人数：20名

* 人数になり次第締め切ります。会員と会員関係者のみ

* 申し込み：‘わんりい’事務局へ

9月定例会：9月22日(金) / 10月号の

おたより発送：9月29日(金)

* いずれも13:30～ 田井宅